2014年3月2日 主日礼拝
説教 愛されて生きる
マタイの福音書17章1-8節

【狂おしい愛】

「イエスは、ペテロとヤコブとその兄弟ヨハネだけを連れて、高い山に導いて行かれた」(1)のはご自分の本当の姿を見せるため。「そして彼らの目の前で、御姿が変わり、御顔は太陽のように輝き、御衣は光のように白くなった」(2)。ある人が、この白さは「天の白さ」だと言いました。聖いお姿、地上にはない白さです。その白さの前に、私たちは自分の汚れを悲しまざるを得ない。愛そのもののお方の前に、愛の足りない私たち。主イエスの白さが近づくことのできない、白さであると、悲しく思う私たちです。けれども、モーセとエリヤが現れて、主イエスと十字架について語り合います。神さまのあわれみ、神さまが人となって十字架にかかってしまう狂おしい愛を。

【これに聞け】

ペテロという人は、ここでもとても愛すべき行動をとります。この栄光に満ちたすばらしい光景をもっとずっとみていたいと思った。思ったら、口に出すのがペテロ。「ここに三つの幕屋を造ります」(4)と。けれども、そこに父なる神さまのみ声が聞こえる。「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。彼の言うことを聞きなさい」(5)。ペテロという人は、しょっちゅう叱られている人なので、ここでも叱られたのかな、と思わないでもありません。けれども、ここで神さまはペテロを叱ったのではなく、「ペテロ、あなたは、モーセとエリヤを見て、夢中になっているのか？けれどもあなたが、目を注ぐべきはキリストだよ。私の喜びであるキリストに目を注ぎ、彼の言葉を聞きなさい。彼の語る愛の言葉を」。そうおっしゃったのでした。

【近づく主イエス】

神さまの声を聞いて「ひれ伏して非常にこわがった」(6)弟子たちに、主イエスが近づいて来て下さいました。主イエスの方から。そして、彼らに手を触れ、「起きなさい。こわがることはない」(7)と言われました。主イエスがさわってくださった、神さまの狂おしい愛が、人となって、ぬくもりのある手で私たちにさわってくださる。そして、こわがる必要のない、やわらかな声が言う。「さあ、ひれ伏していなくてもよい。頭をあげて私をみなさい。こわがらなくてもよい。それよりも、私とともにいることを喜ぶとよい」。そう、おっしゃってくださったのでした。私たちのおびえを知り、自ら近づいてさわってくださる主イエス。私たちの顔をあげさせ、ともしびであるご自身を仰がせてくださる主イエス。「それで、彼らが目を上げて見ると、だれもいなくて、ただイエスおひとりだけであった」(8)。私たちが見上げるならば、主イエスはいつもそこにいてくださるのです。

【私たちの変容】

山の上での主イエスの輝きは、やがて主イエスが復活のときにまとわれることになる輝きをかいま見させます。そして、私たちもまた、復活のときに、この輝きに与る。これは実に驚くべきことです。さらに驚くべきことがあって、それはこの輝きへの変容はすでに私たちの中に始まっているということです。

【フラ・アンジェリコ】

「グイード・ディ・ピエトロ」という修道士で画家がいました。彼をこの本名で呼ぶ人はいません。みな「フラ・アンジェリコ」と呼ぶのです。「天使のような修道士」という意味です。「フラ・アンジェリコ」が描いた有名な絵のひとつを週報に載せました。まさに今日の聖書の個所。「主の変容」という題。この絵を見て気づくのは、主イエスが両手を広げていること。ある牧師がこの絵を見て、こう言いました。「この栄光の輝きに満ちたキリストの姿はやがての十字架をかたどっている。けれども、それにとどまってはいない。キリストはその手で、私たちを祝福しておられる。また、その手で私たちを抱きしめようと招いておられる」と。

狂おしい愛ゆえに、私たちに近づいてくださる神さま。狂おしい愛ゆえに十字架についてくださった神さま。今も狂おしいほどの愛をもって私たちを招いてくださる神さま。この神さまの招きに応えて、今ごいっしょに聖餐にあずからせていただきましょう。